

10 地神塔と地神信仰

春分、秋分に最も近い「戌の日」を社日といい、泉区の各地では、前夜に講の人々が当番の家に集まり、神禮寺（藤沢市西俣野町）の「堅牢地神」の掛軸をかけて、地神の日待を行い、翌日の社日は農耕作業を休んだ。社日は、田の神と山の神が交代する日と考えられたため、その年の稲の豊作を願い、農業に関係の深い土地神様を祀るこのよ
うな行事が行われるようになった。

下飯田左馬神社境内をはじめ、区内各地にみられる地神塔は、昔から地神信仰が盛んに行われたことを物語っている。下飯田町杉の木地区では、春彼岸の社日に現在もこの行事が行われているが、持田藤男氏らの話によると、最近では行われなくなった地区が増えているということである。



地神塔

る。

地神信仰の集団は、一般に地神講、地鎮講、社日講と呼ばれ、講中は比較的狭い地域ごとに構成されていた。松村雄介著『神奈川の石仏』によると、地神塔の造立を伴う県内の地神信仰は、全国的に見られる屋敷神や先祖神のような個人祭祀の対象ではなく、農業などの生産活動の守護を願う「田の神」信仰に類似するのではないかということである。石造物から判断すると、一七〇〇年代の終り頃から組織的に行われるようになったと考えられる。

泉区内の地神塔は文字塔が多く、「地神塔」と刻まれたものや、地神が仏教と結びついて十二天の一神、地天の別称である「堅牢地神」と刻まれたものもある。また、戸塚区をはじめ各地には、国学の影響を受けたと思われるものもあり、五角柱の各面に農業に関わりの深い、「天照大神・少彦名命・埴安媛命・大己貴命・倉稻魂命」の五神の名を刻んだ地神塔もみられる。



掛軸